日本海学シンポジウム

伝えたい「森の心」

日本海を取り囲む地域を学際的に研究する「日本海学シンポジウム」（富山県、日本海学推進会議主催、毎日新聞社、角川書店など後援）が先ごろ、東京都江東区の日本科学未来館で開かれた。宇宙飛行士で同館館長の毛利衛さんが「宇宙と森との邂逅（かいこう）」と題して基調講演。続いて、小出五郎・NHK解説委員をコーディネーターに、作家の木崎さと子さん、平野秀樹・林野庁国有林野部監査室長、安田喜憲・国際日本文化研究センター教授（環境考古学）、安成哲三・名古屋大学地球水循環研究センター教授（気象学）と毛利さんが、「環日本海文明～森の文明パラダイムの可能性」をテーマにパネル討論した。

環日本海文明

小出　まず、日本海を取り巻く地域＝環日本海の一番の特徴を。

木崎　生態系的にも非常に豊かな資源を抱え、多くの人にとって「ふるさとの海」だと思う。

安成　気象学の視点から言えば、日本海の冬がもたらす雪解けの水は、森林が多い日本列島の自然環境、人々の生活の基盤を支えている。

平野　日本海は、それを取り巻く各国が持つ「ため池」であり、共有資源となっている。

安田　日本は雨・雪が多いから森が多い。その森の中に素晴らしい文明がある。深い霧に覆われた環日本海に、人類を救う鍵が隠されている。

毛利　熱帯地域と寒帯地域、双方の特徴を持つほぼ中間に位置しているので、新たな普遍性を全世界に提供できるのではないか。

◆

小出　気候、風土の視点から環日本海をどうとらえればよいか。

安田　まず、環日本海の範囲の位置付けが重要だ。メソポタミアやインダス、黄河文明などの家畜を飼う文明とは全く異質の環太平洋文明があり、そのニつが環日本海となる。私は、環日本海の範囲としては内陸部を含めていない。

安成　確かに一つの集合体と考えられる。また、独自の海流系がある自然環境の視点がある。また文化・歴史的にも、東アジアの文化交流のルートの一つは日本海上だ。

平野　日本海に流れ込む河川の分水嶺までの流域を一帯と考えれば、理解されやすいのでは。

木崎　人間の心という視点で考えると、森から生まれ、かつ海と接する場所から生まれる神話的発想を共有出来る範囲があると思う。

毛利　私は日本海を見て育ったので、季節の変化は、海を見れば敏感に分かる。そうした感覚や食文化は、対岸で近いロシアの人々の文化と共通点がある。

◆

小出　なぜ今、環日本海を起点にした発想が大切なのだろうか。

安田　氷河時代から温暖な時代に変わるときに、世界で最も早く温帯の落葉広葉樹の森が拡大したのが1万500年前の日本列島。だから日本海は、森の海といえる。日本人が日本人たり得たのは、その森の中で生活を始め、森の文明に第一歩を踏み出した時だと考えられるからだ。

毛利　「日本人」より、他国の人々を含めた「環日本海人」という発想を持ちたいと思う。

小出　日本の森の現状はどうだろうか。

平野　大きく四つに分けられる。一つは、手つかずの原始の森。二つ目はスギやヒノキを植えた人工林。三つ目が今、ブームの里山。四つ目が、街路樹のケヤキとかプラタナス。これらの性格を整理しないと、森林政策はうまくいかない。

戦後、かつてあった自然林を、効率主義でスギに変えざるを得なかった。当時は間引きすることが前提だったので、採算が合わなくなって放置したことに現在の森林の問題がある。

◆

小出　今抱える課題と、「森の心」を持った民族として、どのように行動すべきかを。

安成　アジア地域の水循環は非常に活発である。一方で、環境汚染という視点では危険な面もある。日本海は閉鎖されている海域なので、ある日突然、環境の大変化を起こす可能性もある。

安田　森のないところで森の心を持てと言っても無理。だから、まず世界を森で埋めつくす。

小出　しかし、現実は森林破壊が進んでいる。

毛利　森の心を知ってるのは日本人だけでなく、他国の人々も同じ。背景や価値観が違うため、方法論が違うだけ。皆、地球に"限界"があることは、DNAのミクロ的視点と宇宙からのマクロ的視点という、科学分析によって十分に分かっている。今まさに、環日本海学に論理的・科学的な側面からもアプローチして、皆が分かる言葉で発信することが重要だ。

日本海学とは

環日本海地域を一つの圏域としてとらえ、自然環境と人間のかかわり、各地域の人間関係を循環・共生・海の三つの視点から考察する。日本海学推進会議は、各分野の学識経験者らが集まり00年に発足、事務局は富山県。過去2回、シンポジウムを開き、編著「日本海学の新世紀～邊流する文化と美」（角川書店）などを刊行している。

今回も、日本列島を日本海側から眺めた「逆さ地図」が壇上に掲示され、「発想の転換」を考察する討論を導いた。

大勢の聴衆を集め行われたパネルディスカッション　＝日本科学未来館で、五味宏基写す

基調講演

宇宙と森との邂逅

――生命体はつながっている――

私は92年と00年の2度、宇宙に行き、日本海上空はおそらく十数回通りました。とはいえスペースシャトルでは1分ほどで通り過ぎるので、他の景色も同時に見えます。そこで本日は、宇宙から見たさまざまな視点を日本海学に重ねてみようと思います。

環境で一番すぐ変化が見えるのは、本日のテーマでもある水と森林です。具体的にどういう変化が起きているかを、映像で見ましょう。

（ビデオ映写）

中央アジアのアラル海です。ここは、2度の飛行の8年間で（中に浮かぶ）島の大きさが目で確認出来るほど変わってしまった。綿の栽培を目的にしたかんがいの影響です。人間が関与するとあっという間に、環境が変化するのです。

次に、日本海を取り囲む地域を向こう側（環日本海地域）と日本列島側から見てみましょう。

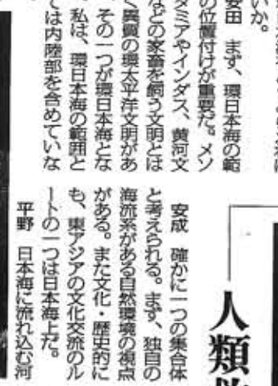
日本海周辺でも確かに汚れている地域はあるが、8年間で大きく変わってはいません。欧米の海域と比較しても水はきれいです。

いま地球環境を人間が変えつつあります。美しい環境を取り戻すにはもう間に合わないと言う科学者は多いが、大事なのは、文明を持つ生物として、間に合うと思って努力することではないでしょうか。科学技術は私たちがまだまだ改善できるという発想のもとに存在するもの。これは、すべての人間の営みに言えると思います。

また、地球の表層40キロに存在する生命体の歴史は、最先端の科学技術研究により、DNAという共通項があることが分かりました。私自身、この生命体のつながりを2度の飛行で感じています。

環日本海学は、日本海周辺に住む人々の日常生活と、宇宙の視点を使えば、私たちがさまざまな課題をシミュレーションするうえで一番扱いやすい範囲、規模ではないかと思います。

毛利　衛さん


安成　哲三さん

アジアの環境問題から

人類救う鍵隠れている

安田　喜憲さん

違う発想で見てみよう

小出　世界に森の心をどう伝えていけばいいかという点について。

安成　広い意味でのアジアに世界の人口の6割以上が住んでいる。だから結局、地球環境問題の背景の大部分はアジア。これをちゃんと解決すれば、グローバルにもうまくいくという希望がある。中でも特に大きな環境問題は、東南アジアの熱帯林、中国の内陸、あるいは中国からモンゴルへ至る乾燥地域の砂漠化の進行だが、もう一つはこの環日本海。このまま温暖化が続くと、最も顕著に影響が出てくる可能性がある。そういう意味での調査が重要だ。

平野　森の心は、研究者のテーマでもあるし、生活者・消費者として、あるいは行政として、それぞれに考え、行動すべきことがある。

環日本海域の人たちの中には、自給自足は極端としても、それに近いことをまた実践している人がいる。都市生活の対極として、共有資源をたくさん持っていた暮らし方というものを見直す必要があり、そういう視点でも環日本海学は検討されるのでは。

◆

小出　最後に、補足する点があれば。

木崎　東京から見れば、日本海は日の沈む場所、夕日のイメージがあるが、大陸から見れば、太陽が昇り、広い海に向かう場所でもある。今までと違う発想で日本海を見てみたい。

安成　日本における水利用、水資源を考えたとき、日本海は大変重要だ。それをキーワードにしてアジアの環境問題につなげたい。

平野　市民に指標となるようなシンボルをつくり出して、この地域の交流事業を始めたらどうか。その際、女性たちの力に期待したい。

安田　森の民の歴史と伝統を、我々自身が再評価しなければいけない。流域を単位にした稲作・漁労民の伝統的なライフスタイルが、水の循環系を核にしている。これを21世紀の知恵として、日本列島に復活することが重要だ。

小出　少しまとめを。日本人も環日本海人のメンバーであるということが第一に大切な点。第二に、環日本海の特徴は水と森であり、水と森を考えることは、まさに文明を考えることにつながる。今はまず森を感じ、その感性を理論的、科学的に解明して世界に伝え、行動することが重要。その原点となるのが、発想を変える日本海学だ。

平野　秀樹さん

木崎さと子さん

小出　五郎さん

象徴つくり地域交流を

日本人もメンバーだ